

北原白秋ゆかりの地に 住んで

島岡明男

(高13回)

はじめに

20年前から東京都江戸川区北小岩に住んでいる。近くに江戸川が流れ、毎日土手を散歩している。途中の京成江戸川駅に近い河川敷に小岩菖蒲園があり、6月には菖蒲祭りで賑わう。最近その案内板で、今住んでいる北小岩8丁目30番地周辺が北原白秋のゆかりの地であることを知った。大正5年に、この地(旧東京府南葛飾郡小岩田村字三谷)にあった富田家の離れの乾草小屋に寓居していた、とあった。まだ若いころで、妻章子と赤貧の生活であったという。乾草小屋と言っても隠居小屋に建てたと思われる立派なもので、床の間付きの八畳間と六畳間、台所があった。白秋は章子が夕餉の支度で立てた煙を見て、乾草小屋を「紫烟草舎」と名付け、気に入っていたようである。八畳間が白秋の書斎で紫檀の机があ



「紫烟草舎」があったと思われ、300年余り前に建てられたと緒ある地蔵が安置されたお堂が見える。

周辺にある北原白秋の歌碑

る。かつて建物があつた場所は、河川改修で地形が変わり定かではないが、「葛飾小品」の記述から佐倉街道と岩槻街道の別れ道付近にあつたと推定でき

周辺には北原白秋の歌碑がいくつも見られる。旧小岩田村の鎮守の小岩田八幡神社には、地区の白秋愛好家が建てた次の歌碑(写真1・78ページ参照)がある。「いつしかに夏のあはれとなりけり

乾草小屋の桃いろの月」

白秋らしく鮮やかに色彩が見え、私が好きな歌のひとつである。

近くの小岩公園にある数寄屋造りの茶室、甲和亭にあるのはこれだ(写真2・78ページ参照)。

「夏浅み朝草刈りの童らが

素足にからむ犬胡麻の花」

白秋は、近隣の子どもたちにも慕われた。周辺には白秋の愛好家も多いと聞く。

里見公園に保存されている「紫烟草舎」にも歌碑がある。白秋の長男で哲学者の北原隆太郎による説明文には、



●しまおか・あきお
飯田市龍江出身。山梨大学工学部機械工学科卒。日本ドレツサ1(株)にて、工場長及び取締役技術生産本部長を経て2010年退職。趣味は囲碁(日本棋院6段)。月に一度、龍江の実家の庭の草刈りや農作業をしている。

り、そこで詩作の構想を練っていたという。そのころの詩集に『葛飾小品』、『葛飾閑吟集』などがある。

ここ周辺は今では閑静な住宅地であるが、そのころは千町田と呼ばれる広大な田園地帯であった。江戸川の土手沿いに千住や柴又から千葉の佐倉に通じる旧佐倉街道がある。白秋が寄寓した富田家は乾草商を営んでいた。周辺には、昔豪農であったことをうかがわせる大きな屋敷の斉藤家や10代続く田中家等が残っているが、富田家は今はない。「紫烟草舎」は、江戸川の河川改修の際取り壊され、昭和45年に白秋のもう一つのゆかりの地である川向こうの千葉県市川市の里見公園に移築され、保存されてい



市川市里見公園に移築され保存されている「紫烟草舎」

「歌碑の文字は昭和12年2月刊行の『葛飾閑吟集』の巻頭からとった父白秋の自筆」とあった。

「華やかにさびしき秋や千町田の
ほなみがすゑを群雀立つ」

白秋の足跡を調べる

そんな縁で、白秋の足跡をもっと詳しく知りたくなり、地元の小岩図書館の協力を得て調べてみた。紹介されたのは、大岡敏昭著の『三人の詩人たちと家』(里文出版・2018年)である。3人とは、同じ時代に活躍した牧水、白秋、啄木である。

同書のまえがきによると、

「明治の終わりごろ、遠く離れたふるさとを出て、文学で身を立てようと上京する三人の若者たちがいた。九州南部の日向坪谷村に生まれ育ち、近くの細島港から神戸に向けて船出した一八歳の若山牧水である。時に明治三七年四月であった。つぎの一人は、九州北部の柳河(現在の福岡県柳川市)に生まれ育ち牧水と同じ年の三月に矢部川駅から汽車に乗り込んだ一九歳の北原白秋である。あとの一人は、東北北部の洪民村に育ち、盛岡駅から汽車で上野に向かった石川啄木である。ときに明治三五年の一〇月であった。」



(写真1) 小岩田八幡神社の白秋の歌碑



(写真2) 小岩公園の白秋の歌碑

白秋と牧水、啄木との交流

白秋は、同じ世代の牧水、啄木等と親しく交流があった。『三人の詩人たちと家』から興味深い話を幾つか紹介する。

啄木の明治41年12月11日の日記、

「帰ってくる、北原白秋君。――予は今日虚心坦懐で白秋君と過去と現在とを語った。実に愉快であった。北原君の幼時、その南国的な色彩の豊かな故郷――そして君はその初め、予を天才を以て自任しているものと思ひ、競争するつもりだといくさは境遇のために勝敗早くついた。予は敗けた。共に夕飯を食った。其詩集『邪宗門』は易風社から一月に出ることになったと。」

牧水と白秋は九州から上京すると、共に早稲田大学に入学した。その教室で2人は出会った。白秋が新しい下宿に移ると牧水もその下宿へ移って来た。白秋の詩文『同

宿時代の牧水』によると、

「入学したばかり或る日、ぶんぐりむっくりの一分刈りの小男が、雑誌『白百合』を読んでいた白秋の肩越しにその雑誌を覗きこんでいた。その男が牧水である。それがきっかけで二人は話すようになるが、彼は白秋にとって最初の友人であった。」

「この二人は在学時代から詩歌の活動に精を出す。白秋は『明星』に投稿して活躍するが、それを一年半で止め、新たに『パンの会』を結成して象徴派に興味を持つ。一方牧水は読売新聞の文藝付録に歌の連載をし、雑誌『新声』の編集にも参加する。そして二二歳になった明治四一年の七月に大学を卒業するが、しばらくして短歌中心の雑誌『創作』を創刊する。その選を白秋に頼み、二人のあいだの往来はかなり頻繁になっていった。」

昭和3年9月17日に牧水がなくなると、白秋は葬儀に駆けつけた。葬儀には太田水穂や斎藤茂吉もいた。白秋は詩文を残した。

「牧水は」まことに酒仙の一人であった。彼ほど心から酒を楽しんだ人はすくなからう。彼はまた健脚で山河を跋涉（たふさ歩きまわること）するを何よりも楽しみとした。彼は辺幅（外から見た様子）を飾らなかつた。彼の性向（性質や行為）は淡々として真率（正直で飾り気

がない）であつた。牧水の歌風はその初め自然主義の系統を引き、つましく、そうしてまた感傷的であつた。（中略）後年になつても彼の歌は玄人受けより何か専門外の文人あたりに感心された。これは彼の歌風が誰にもわかり易く抒情的であり、自然でのびやかで謙譲であつたのに拠るのである。（中略）彼の歌は人磨あたりの嚴肅で高邁な万葉風でもなく俊成あたりの香気深い幽玄体でもなかつた。やはり西行に最も近かつたであろう（牧水逝く）」

この詩文を読むと、高校当時、若い太刀川先生が国語の授業で熱く語ってくれた牧水の「白玉の……」や「幾山河……」等の歌を思い出す。3人の交友録は生き生きとして興味深い。先人の言葉の力に改めて感動した。

長編散文詩『雀の生活』

白秋は「紫烟草舎」の頃、極貧の生活を送っていた。そんな中でも雀を可愛がり、いつも白いお米の粒を与えていた。雀を扱った作品も多い。その頃記した『雀の生活』には、苦楽を共にした詩人の妻子夫人が「若しもあなたが立ち行くことが出来ず、もう餓死するばかりだと云う場合が来たら、この雀たちが一粒でもお米を啜（すす）えてきて、きつとあなたをお助けすると思ひますわ。」と白秋を慰

めるエピソードが語られている。「なるほど、三年後になつて、雀が米粒を一粒ずつ啜（すす）えてきました」。この書物が売れて徐々に貧しさから抜け出せたようである。江戸川の土手を散歩してベンチに休んでいると、鳩や雀がよく寄ってくる。この話が思い出されて微笑えましい。

白秋は多才で、詩や短歌、童謡、民謡と、若いころの『邪宗門』のように耽美的な詩から、子供に親しまれる歌まで、広い分野で作品を残した。軽井沢の風景を読んだ「からまつ（林）を過ぎて」で始まる『落葉松』は、今でも時々口ずさむ。また、童謡では、「からたちの花」や「この道」、「待ちぼうけ」等、民謡では、「ちゃつきり節」、「多摩川音頭」等、今なお歌い継がれ、情景が目に浮かぶ作品が多い。

白秋は、昭和17年11月2日に杉並区阿佐ヶ谷で息を引きとった。57歳であった。

前江戸川区長・多田正見が白秋を詳しく研究していて、甲和亭には同氏が記した小冊子が置いてあり、頂ける。

北小岩の小岩田八幡神社から市川市の里見公園にかけて、白秋のゆかりの地の散策をお勧めしたい。かつて、白秋を訪ねて谷崎潤一郎ら文人が往来したと思われる、京成江戸川駅から北小岩8丁目へ旧佐倉街道を辿ることができる。沿道には、寺社や地藏堂等の昔の風景が残っている。